

第10回研究大会若手シンポジウム報告： 「〈老〉と〈幼〉から考える人間の主体性」

現代社会における生きづらさを考える 人間の尊厳の視点から

A Reflection on the Difficulty of Living in Modern Society: From the Viewpoint of Human Dignity

大倉 茂

OHKURA, Shigeru

老いの問題と幼さの問題を同時に語ることは奇妙にうつるかもしれない。そして、そういった奇妙さはシンポジウムにおいてもさまざまに表現をかえてフロアから問われていたようにも思う。さらに、企画意図を離れて、「若手」シンポジウムで老いの問題を語ることにすら奇をてらったように受け止められているようでもあり、現代社会の老いの問題を批判する立場からの議論を意図していたはずなのに、これまた企画意図を離れて現代社会の老いに対する忌避感を再生産しているように受け止められたようでもある。

さて、第3回若手シンポジウム「〈老〉と〈幼〉から考える人間の主体性」は、第1回と第2回の過去2回の若手シンポジウムでは語りきれなかった論点を〈老〉と〈幼〉をつないでみることで改めて論じてみようということで企画が動いていった。したがって、司会とシンポジストがこれまでの若手シンポジウムの報告論文を読み合わせることから出発した。これまでのシンポジウムのなかで浮かび上がった論点のひとつは、現代社会において、人間が人生

における諸段階すべてで主体的に生きることの難しさである。あえて強調すれば、人間が人生における諸段階において、人間の尊厳を発揮することの難しさ、個を尊重することの難しさと対峙することにこのたびの若手シンポジウムのスタート地点はあった。そこで少子高齢社会といわれ、〈老〉と〈幼〉が同時に問題化されながらも個別に語られがちな現状のなかで、〈老〉と〈幼〉を同時に議論の俎上にのせて議論することとなった。

しかし、そういった企画意図ではあったものの、それがシンポジウムとして具体化しているかどうかは別の問題である。したがって、以下に改めて今回の第3回若手シンポジウムの成果を問うべく、個々の報告論文の紹介、そして司会としての若干のまとめを述べることにする。三者の報告の詳細は報告者による報告論文に譲るとして、本稿では三者の報告論文のつながりと三者の報告論文を読んでいただくにあたっての視点を提供できればと考えている。

現代社会における〈老〉と〈幼〉をめぐる問題は越えてはならない一線を越えた問題としてとらえる

べきではないだろうか。一方で、〈幼〉をめぐる問題としては、象徴的に語られるいじめ、育児ネグレクトといった問題を含めて、人間としての基本的な権利の侵害につながるような認識が社会に蔓延しているように思われる。「国家のために子どもを生むように」といった言説すら聞き飽きてしまうような状況で、子どもを国家の手段として考えることに抵抗がなくなっているのではなかろうか。そして、子どもはリスク、特に経済的なリスクであるといったように語られ、子どもがもつばら経済の側面から語られる言説になってしまっていないだろうか。他方で、〈老〉をめぐる問題としては、元総務大臣の増田寛也がイニシアティブをとっている日本創成会議において「東京圏に住む高齢者を地方に集住化させよう」という議論が東京圏高齢化危機回避戦略として打ち出されている。どこで住むかという重要な選択の場面で、居住の自由という人権さえも奪わんかとする議論のようにも考えられないだろうか。また、シルバー民主主義の名のもとに、国政選挙、地方公共団体の首長選挙、ならびに議会選挙、そして住民投票において、高齢者の影響力が増すことへの懸念から、高齢者を上記の各種選挙、投票から排除しようと訴える言説もある。高齢者には、社会に参画する権利さえもないのだろうか。このように

〈老〉と〈幼〉をめぐる問題は、主体性を奪い、個別的価値を奪い、あるいは尊厳を奪い兼ねない問題として収斂しているとまとめることができよう。三者の論考はそういった共通した問題意識のもとで著述されている。以下、簡単に紹介したい。

福井論文は、前近代社会の〈老〉の多様な価値観を紹介し、その考察を通して、〈老〉を中心的に考察しながらも〈老〉の捉え返しの中から〈幼〉の内実に迫っている。また、福井論文は、これまでの歴

史的経緯からも明らかなように、〈老〉と〈幼〉の排除が恣意的な尺度で決まると主張する。そして、人間の主体性、尊厳といった事柄を基礎にした新しい〈老〉と〈幼〉のあり方を論じなければならないという提言がなされていたように思う。また、人間は「ケアする動物」だという広井良典の主張を踏まえて、ケアなしでは生きていられないという〈老〉と〈幼〉の共通点を浮かび上がらせると同時に、ケアなしでは生きていられないことを弱さだけでなく、強さとして捉えられることが強調されていることは興味深い。そしてそのことは同時に、〈老〉と

〈幼〉から外れる人間にも共通してケアなしでは生きられないこと、言い換えれば老性、幼性といった性質が具わっており、〈老〉と〈幼〉から外れる人間にも〈老〉と〈幼〉をめぐる問題が外的な問題ではないことを示唆しているように、本稿の著者としては考える。

田中論文は、造形ワークショップのファシリテータの役割の視点から、〈老〉と〈幼〉の主体形成の差異に焦点が当てられている。第1回シンポジウムの高橋論文に見られるように、これまで主体形成が〈語り〉という主体-主体関係を基礎にした場から考えられてきたが、主体形成が造形活動という主体-客体関係を基礎にした場を設定し、論じられている。田中論文から見えてくるのは、福井論文の一方で、〈老〉と〈幼〉の差異であり、それを通じて〈老〉と〈幼〉の共通点が見えてくる。〈幼〉は経験を消しやすい一方で、〈老〉は経験を消しにくい。他方で、主体の形成には、ファシリテータの役割、すなわちケアが求められていることが共通点として見出されることが興味深い。

そのことはケアがしばしば、負担と密接につながると同時に、生命の維持に不可欠であるとされる中

で、ケアをお互いの主体性の発露のきっかけとして捉える可能性を主張しているようにも受け取れる。より具体的に言えば、〈老〉と〈幼〉は手がかかる。それ故に邪魔だ。そのように捉えられてきたわけだが、〈老〉と〈幼〉は手をかけることによって、その尊厳が生まれると田中論文は主張しているようにも考えられる。そのように考えれば、手をかけるというしばしば手間として捉えられる事柄が積極性を帯びてくることとなる。言い換えれば、人間の主体性が認められていく文脈の中でケアの必要性が叫ばれてきたが、ケアが単なる必要性を超えて、人間の自由を拡大させていく契機として積極的な文脈に位置付く可能性を田中論文は提起しているように思う。

藤原論文は、これまでの若手シンポジウムの検討を踏まえて、消費文化論の視点から主体概念に注目する。単なるジェネレーションギャップに還元され得ない、〈老〉と〈幼〉の分断をどう乗り越えるかという問いと格闘している。先に述べたようなシルバー民主主義なる言葉で、現状の少子高齢社会における高齢者の投票行動を、高齢者が投票に行くことで民意が歪められていると批判し、高齢者を民主主義の枠組みから排除する議論が声高に叫ばれ、まさに単なるジェネレーションギャップに還元され得ない、〈老〉と〈幼〉の分断状況がある現代社会のあり方を考えると、藤原論文は、われわれに差し迫った問題を考えていることが理解できよう。なぜそういった分断が起こってしまうのかを自治文化継承の困難さに着目して考察する。そして、消費社会化以前の人間の主体性と、消費社会化以後の人間の主体性の大きな隔たりにあると結論づけている。

以上、簡単に三者の論文の紹介を行い、若干のまとめと司会なりの考察を述べた。改めてまとめるならば、〈老〉と〈幼〉をめぐる問題を考えることは、

〈老〉と〈幼〉をめぐる問題のみを考えるのではなく、一見〈老〉と〈幼〉から外れる人間の問題を考えることにも通じ、もし人間らしさというものがあるのならば、〈老〉と〈幼〉をめぐる問題を考えることで人間らしさ一般を考えることになるということである。〈老〉と〈幼〉をめぐる問題をわれわれ人間の問題として考えなければならないというのが若干強引かもしれないが、本稿の結論としたい。

この論考を含めて、三者の論文が先に挙げた現代社会における〈老〉と〈幼〉をめぐる問題にどれだけ応えられているかについては読み手である皆さまの判断に委ねたい。しかしながら、先に挙げた現代社会における〈老〉と〈幼〉をめぐる問題において、総合人間学会として〈人間とはなにか〉という原初的な問いを発することから議論を始めなければならないのではないだろうか。

そういった議論がこのシンポジウムの企画からはじまり、総合人間学会のなかで議論空間が形成されることを切に願っている。皆と問いを共有することから総合が始まるのではないかと考えるので、以下の報告論文を通じて皆と問いを共有できればと思う。

[おおくら しげる／立教大学兼任講師／哲学・倫理学]